むつましや梅に柳の朝日かけ　草栖
蓬莱のみねや夜影の猶高き　草友
巻むしろまてとて来しか蝶一つ　草甫
しら梅や里の日暮をすゝみ出る　芳艸
初空にむかふて行や鳥一羽　完鴎
魚うりにけさは起かつ袷かな　喜山
むさし野や小松まはらに花菫　布川
□梅や垣に木戸ある人出入　五渡
□りの酒の香に見る柳かな　渓齋
夕顔やほの〳〵明も暮もやう　未足
散残し□とひら暮てけしの花　曲川
□□□□□□□□□□□□□□□□□　琴堂
□□□□□□□□□□□□□□□□□　更貫
□□□□□□□□□□□□□□□□□　彦貫
傘さしてなかめて居るや雨の花　雪麿
松竹のそよきにのほる初日かな　鳥扇
夏こもりやしらねは遊ひ事らしき　葛古
石蕗の葉の地にうなたるゝ暑哉　伏龜
膳に立陽炎や日は障子こし　呑江
膝近うよせてすゝしや草の波　淡處
くゝり出て卯の花こほす家鴨哉　精知
指たとも見えぬ茂や五加木かき　武栗
菜の花のさかりや旅もして見たき　鳩山
雨のあとかわくも早しはつ桜　清暉
庵の夜も奇麗になりし蛍かな　斧年
火の見えてくるゝ間のあり春の月　圭布
春もまた寒き月夜や松の声　凌華
月に坐をゆつりて戻る花見哉　黙庵
魚飛て松にそれ鵜の羽音かな　田楽坊
雪のある山もひかんの日さし哉　麦霞
何ひとつ動くものなし雲のみね　狐立

賀章おの〳〵前書を略す

しら梅や寒さもしらぬ咲ちから　住よし
まきふやし〳〵て米の種おろし　無底
余余まて蒔殖しけり米の種　虚楽
枝葉までさせは根の出る柳かな　竹外
蓬莱に積こむ老の齢かな　風客 松郎

春なれやなへてみとりの九折　幽香
三夫婦の一坐にならふほたに哉　米海
眉にふる契もふかし松の花　呉雪
月花もふたり前みる翁かな　蘭城
また伸る節もいくつそことし竹　以足
咲ほとの花にめてたき菊の色　ノ左
もゝとせに手のとゝき梟梅の花　野外
くれないは老てもさめす梅の花　省甫
蓬莱と齢くらへん万年糧　霞朝
老て後若やく木なり青柳　銀岱
千代の色をかさねて茂る梅柳　木紫
友とする松におよほす齢かな　緑陰
老々て猶寒からしはつ袷　丹洲
年若な人にましりて花見哉　鴎侶
千年には幾世かさねて松の花　花月女
たのもしや屠蘇にならひし老夫婦　希聲
寄る皺の年にうつくし峰の松　珍齋
孫彦も玄孫も鶴の巣立かな　雲底
長閑さや巌に似たる松の幹　梅丘
又芽さす米も八十八夜かな　雨柳
薄垣に笑ふ影すく外山かな　希石
老の手の杯よふや花のかけ　桃呉
竹の子や殖るにつれて垣の外　李陽
八方へはる□すゝし松ひと木　忍和
黄鳥の老しは去年の名のみかな　守黒
若やかに年ふるものそ松と梅　雪岡
十かへりの松にくらふる齢かな　松郭
百までも笑ふ雀や千代の春　蘭臺
松山の末の見こせぬしけり哉　東洲
米の年松のよはひの梵かな　清美
□□□□□□□□□□□□□□□□□　守静
峰はまた遠き山路のしけり哉　湖山
咲あかて根つよき梅の木ふり哉　田甫
太はしや今もむかしの新らしみ　雨篁女
古茶新茶つきせぬ老の笑顔哉　省我
香を汲ん老木の梅の下流れ　龍湖
あやかりにわけてもらはん菊の苗　其残